

【桃の里】 もものさと

陶淵明の『桃花源記』の話をご存知の方も多いことと思います。

陶淵明は六朝時代の詩人で、『桃花源記』はある理想郷についての散文です。原文は長いのであらずじだけお伝えしましょう。

東晋の時代、洞庭湖の西の武陵で漁師をしている者がいました。

彼は溪流に沿って舟を進めるうちに美しい桃の花の咲く林を見つけました。

漁師は林の奥まで見とどけようと舟を降りて奥地に向かいました。狭い洞穴を抜けて広い場所にでると、鶏や犬の鳴き声がする村に行き着きました。

そこに住む人々は服装が異なり別世界の人のようでした。老人も子供もみな楽しそうに生活していました。

彼らは漁師を見ると驚き、どこから来たのか尋ねました。

詳しく答えると、村人たちは集まって酒の支度をし、鶏をつぶして歓迎してくれました。

彼らによれば、祖先が秦の時代に世の混乱を避けて人里はなれたこの地に移り、その後外界と接することなく代々暮らしてきたとうことです。

彼らは秦が滅んだことも、漢、魏、晋の時代も知らずに暮らしていたのです。

村では皆が労働し、身分差のない平和な社会であったということです。

数日後、漁師はこの地を去り帰宅します。後日、目印をたどり再びかの地を訪れようとしますが、ついに見つけることはできなかったということです。

陶淵明以来、この話は「桃源郷」「桃花源」「武陵源」などとよばれ語り継がれてきました。

もちろん実話とは言い難いのですが、超人的な仙人の住む神仙界のユートピアとは大きく趣を異にし実感のある話です。

狭い日本でも平家の落奴村伝説は各地にあったようです。

ましてや広大な多民族国家の中国では、他の部族と交流せず、存在すら知られていない隠れ里は、実際にありえたのかもしれませんが。

何らかの伝説か実話を下敷きにして創作した話かもしれません。桃を景物としたところに陶淵明の才が光りますね。

「桃の里」とは桃の木のある里という意味です。桃花源を和語に直したような地名で、『桃花源記』の話の連想させます。政変に巻き込まれず、皆が楽しく平和に生活している、小さくとも人情あふれる村を想像させます。

桃の実は長寿の象徴でもあり、桃の花は春の暖かさを連想させます。地方分権の時代に相応しい銘ではないでしょうか。

現在、桃の里を愛称にする市町村は山梨県、長野県だけでも数ヶ所あるようです。